
鬼切り

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼切り

【Nコード】

N3087J

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

この山には人食い鬼がいるという。
なので、すぐにでも山を下りたいのだが、いかんせん道が分からない。
い。

もう日が暮れそうになった頃、一軒の小屋を見つけた。
明らかに怪しいのはあるが、闇もようよう深まりだし、外にいる
よりかは幾分かましかと戸を叩いた。

この山には人食い鬼がいるという。
なので、すぐにでも山を下りたいのだが、いかんせん道が分からない。

もう日が暮れそうになった頃、一軒の小屋を見つけた。

明らかに怪しいのではあるが、闇もようよう深まりだし、外にいるよりは幾分かましかと戸を叩いた。

「はい」

女の声がした。

戸が開かれ出てきたのは、かっぶく 恰幅の良い女だった。

「突然の訪問、すみません。私、道に迷いまして。それで、もしよろしければ今晚、一晩だけでも泊めてはいただけないでしょうか？」
「それは大変ですね。こんなおんぼろな家でもよろしければ、どうぞ。」

女は何が楽しいのか、始終にこにこしていた。

「それではお邪魔いたします」

家の中は簡素ではあるが、必要な物は一通りそろっている様である。掃除は行き届いているようで、好感がもてた。

「ちようど食事の準備をしていたので、もしよろしければ一緒にいかがですか？」

木製の食卓の上にはこれでもかというほどの豪華な食事が用意されていた。

「すごいですね。何かのお祝いなのですか？」

「いえ、いつもこんな感じですが。けれど、少々普通の方より多いかもしれませんね」

これほどの食事を毎日食べているのだろうか。

だとしたら、この女の体格も合点がいく。

しかし、こんな山奥でいつもこんな食事をしているとは、この女一

体何者であろうか。

もしかしてこの私があることを知っていて、用意されたものではないかとも思えた。

拭いきれぬ猜疑心さいぎしんに私は遠慮を申し出ようとしたが、腹の虫が口答えした。

「ふふふ、遠慮なさらずとも沢山ありますので。どうぞ召し上がってくださいな」

「・・・では、お言葉に甘えさせていただきます」

料理は意外というか、見た目そのままおいしかった。

料理の中には話でしか聞いたことの無いような高級品や珍味も混ざっており、話はまず食べ物の話から始まった。

それから話は自身の身の上話に飛び、季節の時事、そして、最後には、

「もしお気を悪くされたならば、申し訳ない。こんな山奥に女一人で住んでいるのはいささか不便ではありませんか？」

「それはもしかして口説いておいでなのでしょうか？」

「いえ、そういう訳では。っというのも失礼な話ですか。ただこんな山奥に女一人住んでいるのには何か訳があるのではと邪推しただけでして」

「そうですね・・・」

そう一言漏らし、今までにこやかだった女の表情が曇った。しまった。

虎の尾を踏んだか。

私は女の顔を見ながら気が遠くなっていった。

完全に気を失う前、女の顔から雲が晴れていくのが見えた。

「それは、後で分かります」

「ううっ」

体の節々が痛かった。

ここは何処だ？

床の冷たさに身震いする。

「おお、気付いたか」

声がした。

それと同時に地鳴りのような音がした。

「ここは一体？」

「すまん。俺の嫁が無茶したようで嫁？」

ぼやけた視界が回復すると、私はその場から飛びのいた。

そして、後ろにあった鉄格子に体を激しく打ち付ける。

痛みよりも恐怖が勝った。

「驚かせて、すまぬ。とりあえず話を聞いてもらえぬか？」

そこにいたのは、まさしく鬼だった。

鋭い爪と牙、爛々（らんらん）とした目、二本の大きな角。

「く、来るな。私なんぞ食べてもおいしくなど無いぞ」

半狂乱に私は鉄格子を揺すってみるが、びくともしない。

そして、また地鳴りが響く。

「ああ、すまん。また腹が鳴った」

私が地鳴りだと思ったのは鬼の腹の音のようだった。

よほど空腹なのだろう。

それならば、私のようなものでも食いたくもなるかもしれない。

そう思うとさらに恐怖がまし、私は情けなくも助けを請うて大騒ぎするのだった。

「あら、まだ食べていなかったの？」

鉄格子の向こう側に先程の女が現れる。

「助けてくれ！お願いだ！まだ死にたくない！こんな鬼に食われたくないんだ！」

女は無然とした態度で私を無視して、鬼を見ていた。

「俺は食わんよ」

「へ？」

後ろからの声に私は素っ頓狂な声が出た。

「だから、俺は人を食わん」

信じられないと、私はまじまじと鬼を見る。

その姿は人を食うための様でしか見えなかった。

「そして、飢え死ぬつもり？」

「ああ」

「どうして、そんな、強情なの？」

「すまん。お前には辛い思いをさせる」

女は泣き崩れ、鬼は頭をかき、私は呆然としていた。

「話、しても良いだろうか？」

「・・・ええ」

鬼は私の返答ににこりと笑った。

事の起こりは鬼が女をめとったことから始まった。

鬼の一目惚れだそうで、あったその日に連れ去ってしまったそう。最初、女は泣いているばかりだったそう。

それもそうだと思う。

けれども時の流れとともに、愛し合うようになったそう。

その頃からだろうか、鬼が人を食わなくなったのは。

いつも食事時になると鬼は家を飛び出るのだそうで、外で食っていると女は信じて疑わなかった。

けれど、日に日にやつれていく鬼に気付かない訳は無かった。

人を食うのをやめた鬼の事を知った女は、自分を食えと誘ったそう。

鬼は牙を立てそうになるが、自制が利いたのか、自分で籠ってしまっただけ。

それから女は自分を食ってもらおうといういろいろしてみたが、駄目だった。

その体格も『いかにうまさうに見えるのか』を突きつめたものらしい。

「はあ、そんな事が」

「けれども、もう何をしても無駄みたい。この人、頑固者だから」
「すまん」

鬼と女が二人並ぶと、その中睦ましい様が垣間見える。

鬼の弱った体を氣遣う女。

「ところであんたに相談があるんだが、良いかね？」

「ええ。私にできることでしたら」

鬼のお願いとはいかなるものか。

とんでもないことを想像しながら、早まったかなと少し後悔した。

「それじゃあ、お願いしようか。実はこの山には鬼が出ると言う噂がある。まあ、その鬼とは俺のことなのだが。それでたまに鬼を退治しようと言う輩や興味本位で鬼を探すものがある。そこでそんな奴らが山に入ってこられないようにして欲しい。このまま俺は穏やかに最期を迎えたいからな」

「それはまた難しいお願いですね」

「なに、そうでもないさ。あんたが鬼を退治して、その血で山が穢けがれてしまった。だから、穢れが薄まるまで少しの間入らないよう吹聴してもらえばいい」

「それで本当に事が治まるのでしたら良いのですが・・・」

「まあ、やって駄目だったらこっちも諦めるよ。俺が死ぬまでの間もてばいいだけだから」

「そうですか」

それからまた泣き出した女を鬼はなだめながら、山を下りる私を見送った。

そして、私は鬼切りと呼ばれるようになる。

皆に褒め称えられるたびに、私はいたたまれない気持ちになるのだが、あの二人の事を思い、口をつぐむのだった。

願わくば、あの二人が最後の一時まで幸福でありますよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3087j/>

鬼切り

2011年1月19日05時44分発行